

CAL
EA947
B71
#46 JAN. 1983
DOCS



特集・カナダの野生動物

1983年1月

No. 46

ISSN 0389-1852

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
Feb. 14 1983
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E

3 5036 01030028 6

60984 81800

トピックス——2
 カナダ野生動物見聞記・五月女次男——4
 北国のどうぶつたち——6
 野生動物の天国・国立公園——10
 カナダの野生動物対策——12
 カナダ・サケ事情・吉崎昌一——13
 われら姉妹都市⑦ 千葉&ノース・バンクーバー・土屋津以子——14
 カナダ人物記⑦ マーガレット・アトウッド——15
 編集後記——16

Bulletin Canada

発行



カナダ大使館

TOPICS

カナダの衛星打上げ二十周年に
今後はスペースシャトル搭乗も

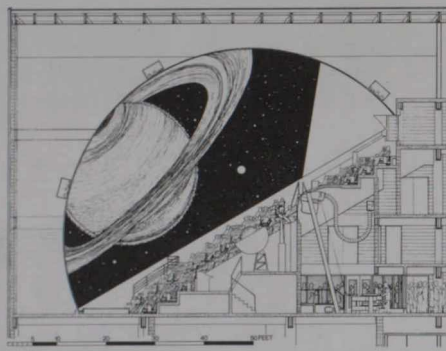
カナダの第一号人工衛星「アル
エット1」が打ち上げられてから
昨年二十周年を迎え、十一月に
通信研究センター（オタワ）のデ
ビット・フロリダ研究所で祝賀会
が開かれた。

カナダは、一九六二年のアルエ
ット1号以来、電離圏観測衛星I
SIS、アニクA、ヘルメス、と数
々の国内用衛星を打ち上げてきた。
最近では、昨年六月にソ連が打ち
上げた探査・救助衛星（SARS
AT）に米国とともに協力した。
ブリティッシュ・コロンビア州の
山中に墜落した軽飛行機の乗員三
人が、この衛星のおかげで救助さ
れている（既報）。（今年一月には、
米、加、仏の三国によって開発さ
れた探査・救助衛星が打ち上げら
れることになっている。八月十
六日には、初めてカナダ企業（ス
パー・エアロスペース）が中心に
なって建造した通信衛星「アニク
D1」が打ち上げられ、十一月に
は「アニクC3」が米国のスペー
スシャトルから打ち上げられた。
カナダはまた、欧州宇宙機関が開
発を進めている宇宙実験室「スベ
ーラ」計画にも参加している。

米国のスペースシャトルにカナ
ダ人を搭乗させる計画もあり、目
下その人選が進められている。
カナダの人工衛星技術は世界で
も最先端にあり、通信、救助、資
源探査その他の分野で今後ますます
活用されるはずである。

カナダ製の超大型映画 横浜子供科学館に設置

百八十度魚眼レンズのついた映
写機で、七十ミリの超大型フィル
ムをドーム型の超大型スクリーンに
映し出す——この異例づくめの映
画館が、来年五月にオープン予定
の横浜子供科学館にできる。



ドームの内壁全体がスクリーンになったオムニマックス

この映写方式は、トロントの
MAX Systems社が開発したもの

で、日本では、一昨年の神戸ホー
トピアと北海道博で紹介されたが、
常設館としては初めて。

IMAX社は、これまでに六階
建てのビルと同じ高さで、幅がお
よそ二十五メートルという超ワイ
ド・スクリーンと八十八個のスピ
ーカーを使った超大型映写方式I
MAXを開発しているが（大阪万
博や東京晴海の宇宙博で公開され
た）、横浜子供科学館の宇宙劇場
に設置されるのは半球形の画面に
映し出すOMNIMAX。映像、
音響とも、すさまじいほどの臨場
感と圧倒するような迫力をもつて
いる。

オタワで「原爆の絵」展 期間延長して数万人が見学

広島の被爆者が描いた原爆の絵
が、昨年六月十日から三か月間に
わたってオタワのカナダ国立美術
館で展示され、大きな反響を呼ん
だ。

この展示会は、同美術館が広島
文化センターから借りて催したも
ので、当初は二か月の予定だった
が、市民の関心が高いため、一か
月延長された。その間に五万人以
上の人々が会場を訪れ、新聞やテ
レビも大きく紹介した。

この展示会を企画したブライア
ン・スミス収集調査副部長は、「延
長したのは驚異的なこと」だ、
と述べている。
展示されたのは、広島文化セン

ターが保管している「市民が描い
た原爆の絵」の一部。被爆者が自
らの体験を描いた二千点余りの絵
から、百一点が紹介された。

スペースシャトルから打上げ テレビ中継用の衛星アニクC

カナダの通信衛星「アニクC3」
（写真）が、十一月十一日に発射され
たNASA（米航空宇宙局）のスペ
ーシャトルから打ち上げられた。

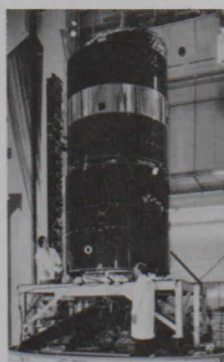
アニクC（アニクとはエスキモー
語で「女の人の男兄弟」の意味）がス
ペースシャトル「コロンビア」から
引き離されたのは、米中部時間で十
二日午後二時二十四分。コロンビ
アの荷物室に積まれて東太平洋方
ラバゴス諸島の西方三千キロの赤
道上空に運ばれた衛星が、底部に
取りつけた固体燃料ロケット（キ
ック・モーター）とともに回転台
によって一分あたり五十回の速さ
で回転されたあと、ロケットの底
につけられた四つのバネによって
宇宙に放出された。

衛星は、コロンビアから一秒間に
約六十センチの速さで離れたあと、
ロケットのエンジンが自動的に噴
射し、赤道上空三万六千キロの静
止軌道に向けて飛んでいった。（軌
道修正は地上からの電波によって
なされた。）

スペースシャトルからの衛星打
ち上げは、前日の米国の通信衛星
「SSBS3」に続くもので、これ
によってスペースシャトルの宇宙
発射台としての性能が確認できた。

新方式による打ち上げ費用は、従
来のロケット方式のほぼ三分の一
といわれ、経済性、安定性からも
成果が高く評価された。

今度打ち上げられた衛星は、カ
ナダの通信サービス会社テレサッ
ト・カナダが計画している三個の
アニクC衛星のひとつで、残りの
二個は今年四月および来年四月、
スペースシャトルから発射される



ことになっている。

アニクCは、十四および十二千ガ
ヘルツという高周波数帯のみを利
用する円筒形の衛星で、十六の無
線周波数チャンネルを備えている。
各チャンネルは二個のカラーテレ
ビ信号を伝達できるので、一個の
衛星で三十二のテレビ番組が中継
できる。現存する通信衛星として
は、北米で最も強力なもので、放
送、ビジネス通信、その他の目的
に使われることになっている。

高まるカーリング熱 北海道と東京で

今年もカーリングのシーズンが
やってきた。

すでに十一月下旬からカーリン
グを始めた北海道では、三月十九
日から二十一日まで真駒内屋内競

技場で開かれる第二回北海道カーリング選手権大会(北海道カーリング協会主催)をめざして、各チームが練習に励んでいる。北海道だけて十二のカーリング協会ができており、また今年は選手権大会にレディス部門も設けられ、カーリング熱はいよいよ高まるばかりだ。

また関東では、東京カーリングクラブ(事務局・川崎市麻生区高石二)ハイデンス(一四)が、十二月から日比谷シティ・スケートリンクでカーリング教室(三月四日まで、毎週火・金曜日の晩)や、リーグ戦(三月二日まで、毎週水・日曜日の晩)を催している。一月二十二日には長野県のホテル・ピラタ科でクラブ・トーナメント、二月二十六日には東京のよみうりランドで第二回全日本カーリング大会を開催する。

トヨタがカナダに部品工場 アルミホイールを生産、輸出

トヨタ自動車が、ブリティッシュ・コロンビア州にアルミ部品工場を建設することになった。日本の自動車メーカーがカナダに部品工場をつくるのは、これが初めて。十一月十二日にバンクーバーで行われた、ベネットBC州首相、ラムリー連邦政府地域経済振興兼通商産業大臣、フィリップスBC州産業・中小企業開発大臣、東郷トヨタ・カナダ社長の共同発表によると、工場建設予定地はバンクーバー市の南約十五キロにあるデ

ルタという町のティルブリー工業団地。建設費は約二千三百万ドル(約四十二億円)。当初は年間二十万個のアルミ合金ホイールを生産するが、将来はその他のアルミ部品も作る予定だという。アルミ・ホイールの七五パーセントは日本に新車用商品として輸出され、残りはカナダと米国で交換部品として販売される。

工場は八三年夏までに着工し、八五年半ばには稼動する予定。従業員は約百人で、そのほかにも間接的にかんりの雇用が創出される見込みである。

同アルミ工場建設に対し、連邦およびBC州政府は、特別優遇措置として五百五十万ドルを低利で融資することになっている。

トヨタのカナダ進出について、ラムリー大臣、フィリップス大臣とも、これは両国自動車業界のより緊密な連携の前兆であり、今後カナダにおける日本の自動車部品生産の大幅増大につながる可能性もある、として歓迎している。

カナダ軍艦での感動的場面 清水市の保育所長が紙芝居に

日加友好親善のため静岡県清水港に寄港したカナダの軍艦で起こった心温まる触れ合いが、紙芝居にまとめられ、障害者福祉都市キャンベーンの一環として清水市が行った幼児向け紙芝居シナリオ募集で、みごと最優秀賞に選ばれた。

これを報道した読売新聞(静岡版、昨年十一月四日)は、こう伝えている。「話は三年前の五十四年五月二日にさかのぼる。日加友好促進で清水港にカナダ海軍の軍艦「レスティゴ」が寄港、市立清水保育所の年長組五十人が艦内に招かれた。園児たちは杉村所長に連れられ、港までの二、三心を心勇んで歩



ゆりちゃんを抱く艦長

いた。この中に、足の不自由なゆりちゃん(五歳)がいた。ゆりちゃんも保育所から、ありつたけの力を出して歩き通した。お友だちも励ました。軍艦に着いた。甲板で園児らは艦長や乗組員に花束や自分たちで作ったレイなどをプレゼントした。

そのときだった。艦長が足の不自由なゆりちゃんに近づいた。花束の中から一番きれいな赤い花を一本抜いて、目を大きくあけてびっくりしているゆりちゃんの胸のポケットに入れ、そして抱き上げた。さりげない振る舞いに園児や杉村さんらは一斉に拍手を贈り、それが引き金になって園児は次々にだっこされた……」

杉村さんはこの光景を「ゆりち

やんとおともだちとねこ」という題の紙芝居のシナリオにして応募したところ、最優秀賞に当選。この軍艦と園児の触れ合い、杉村さんのシナリオなどの話は、「永久に残る感動的瞬間」という題で、カナダ海軍の機関誌にも紹介された。紙芝居は市福祉部で制作し、市内百五十か所の保育所などに贈られた。

函館とハリファックス 日加間の姉妹都市21号に

函館市とカナダの東玄関ともいえるハリファックス(ノバ・スコシア州州都)が姉妹都市となった。カナダと日本の姉妹緑組としては、昨年十一月の大府交野市とオンタリオ州コリンウッドに次いで二十一番目、北海道では一昨年七月の白老町—ブリティッシュ・コロンビア州ケネルに次いで六番目。北海道とアルバータ州の提携を含

めると、それぞれ二十二番目、七番目となる。

ハリファックスは水産資源が豊富で、沿岸で発見された石油・天然ガスの開発基地にもなっており、水産加工など産業技術の交流を強く望んでいるという。

両市の姉妹都市提携調印式は十一月二十六日、ハリファックス市で行われ、矢野市長、越前市会議長、川田函館市商工会議所会頭が出席した。

野生動物特集「映画の夕べ」

カナダ大使館では、第四回「カナダ映画の夕べ」を、一月二十六日午後六時から、東京・渋谷のAZシアター(公会堂向かい)で開催する。プログラムは長篇記録映画「野生の叫び—狼の生態」ほか野生動物に関する映画数本。入場は先着順(百二十人まで)で、無料。

郵送リストを改訂します

今年の3月号から、本紙の郵送リストを改訂します。

3月号(3月中旬発行の予定です)が2部、3部も配付されている方、配付洩れになって今後ともお読みになりたい方、お名前や所属名が間違っている方は、ご面倒ですが広報部までご連絡下さい。その他、お気付きの点がありましたら、お知らせ下さい。

ご連絡の際は、コード番号、所属名を明記して下さい。

なお、発行部数に限りがありますので、お送りできないこともあります。その場合は、お近くの図書館をご利用下さい。ほとんどの公立および大学図書館には、広報紙をお送りしています。

新しい郵送リストが定着するまでには、しばらく時間がかかると思います。ご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



カナダ野生動物見聞記

おとめ つぐお
五月女 次男

バンクーバーのスタンレー・パークを歩くと、リスがあちこちで跳びはねている。慣れてしまえば別に驚くこともないが、初めてカナダの大地を踏んで野生動物を見ると、これは日本とは違うぞ、という気がして来る。

バンクーバー島の北にポート・ハーデューという小さな村があり、そこからポートで海に出ると、七月―九月ならシャチが見られる。北太平洋にいるシャチは、夏になると、バンクーバー島の内海にやって来て、主に鮭を食べる。鮭が川を上る九月下旬になると、シャチもまた北の海に帰ってしまう。シャチはクジラを襲うのでキラウエールとも呼ばれるが、一般的には余程食べる魚が少ない時以外は、他のクジラ類を襲うことはない。時間は一定していないが、日に二、三回、シャチは十頭ぐらいの群れをなして内海に現われる。シャチが往復するルートも大体決まっている。それは恐らくシャチが最大の獲物とする鮭の生息場所と関係があるのだろう。大きな背ビレを水面から出してゆつくりと泳ぐ姿は、まさに海の王者の風格がある。

国立公園の動物たち

バンクーバーから北上してロッキーマウンテンを越えると、日本人には最も人気のあるバンフ国立公園がある。この公園を縦貫するハイウエーを走る車の中から、時にヘラジカが見られよう。シカの仲間では最大の動物で、大きいのは体長三メー

トル、体重八百キロもある。

ヘラジカは、トナカイと違って、大きな群れは作らない。単独か少数の群れで森林や水辺を歩いている。食物は草や木の葉、広葉樹のカバ、ハンノキ、ヤナギの葉などを食べる。ヘラジカは走るより泳ぐのが上手だ。聴覚が鋭く、天敵のオオカミが近づくとすぐに察知して逃げる。

ロッキーマウンテンから北極圏あたりまでの森林帯には、ハイイログマ、クズリ、オオカミ、キツネ、コヨーテ、カナダリスなどが住んでいるが、いずれもなかなか人の目にはつかない。バンフ国立公園からさらに北に向かうと、ジャスパー国立公園。ここは北米最大の面積をもっている。このハイウエーでハイイログマに出会うのは割りとやさしい。最近ではキャンプ場やホテルの残飯をあさるためにゴミ捨て場にやって来るようになって、この数が多いので公園管理官を悩ませている。体色は必ずしも灰色ではなく、さまざまの色をしている。ロッキーマウンテンの中腹あたりまで登ると、ガレ場の上にドールシープ（野生のヒツジ）がいる。岩山の近くではシロイワヤギ（別名マウンテンゴート）が小さなグループを作っているのが見られる。

北米大陸では、アメリカよりむしろカナダのロッキーマウンテン周辺の方が、多くの野生動物に接する機会が多いだろう。それだけに、一人歩きは危険な場合もある。国立公園の管理官によく聞いてから出かけることだ。

カナダでは北緯六十度線を一応の区切

りとして、そこから北を北方と呼ぶ。場合によっては、そこから北極圏内と言うこともある。アラスカ・ハイウエーをどんだん北に向かい、この北緯六十度を越えると、樹林もいくらか低くなってくる。一般的には、野生動物は朝方と夕方によく活動するので、その時間になったらゆっくりと車を走らせて左右に注意すれば、動物の動く姿が目に入るだろう。

カナダリンクスを見た

数年前の冬のある夕方、私はこのアラスカ・ハイウエー上で、カナダリンクスを見た。車の前方二百メートルぐらいの先に、二匹の子連れのツガイが目に入った。まずオスが道路上に現われて、危険がないかキョロキョロしている。やがて子連れのメスが道を横切って行った。このハイウエーでは、一本の高い木の上には止まっているフクロウを見だし、道には巨大なヘラジカの死体がごろがっていた。大型トラックにはねられたらしい。疎林地帯では野生馬の群れも見つけた。野生の馬だけに荒々しく、余り近づけなかった。北西準州の首府イエローナイフに来ると、ブッシュ（森林）もずっと低く、まばらになる。そこはカリブーの住み家でもある。カリブーとは北米にすむ野生のトナカイのことだ。

このシカはオスだけでなく、メスもツノをはやしている。シカのなかまでは唯一の例外だ。メスのツノはオスより小さく、単純な形をしている。カリブーは、

このあたりのが一番大きく、最北にすむペアリー・カリブーが最も小さい。それは食糧となる草やコケの量によるものと思われる。カリブーは、冬は南のブッシュの中にすみ、春になると北に向かって移動を開始する。

カリブーはヘラジカと違って大群をつくる。彼らの最大の敵はオオカミで、カリブーの群れの周囲には必ずオオカミがいると言われる。オオカミは、子供のカリブーや足の弱いカリブーを狙って襲う。カリブーは群れを守るために、弱った個体をオオカミの犠牲にすることもいとわれない。四月頃から移動を始めたカリブーは、ブッシュを抜けて草原ツンドラに留まって子を生む。移動しているカリブーのメスの殆んどが妊娠しているとも言われる。カリブーは政府によって保護されており、北西準州では空から追跡して写真をとることも禁じられているが、大群以外なら、インディアン村の近くでも、道路のわきでも時どき見ることが出来る。

マッケンジー川の岸边に集落をつくっているインディアンは、近くの森林に住む野生動物を主としてワナでとって生計を立てている。リンクス、ウサギ（ヘアー）、ビーバー、マスカラット、キツネ、オオカミ、ミンクが主な野生動物だ。ビーバーは、川や湖、沼に住み、近くのヤナギ、カバ、ハンノキの茂みにダムをつくることで知られている。泳ぎと潜水を特技とし、作ったダムの中にすむ。マスカラットは巨大な水棲の野生ネズミで、

水辺のやぶにすむ。そのマスカラットをねらうのがミンク。森にすむオオカミをティンバーウルフと呼び、草原に多いコヨーテは草原オオカミとも呼ばれるが、本当は別の野生のイヌ科の動物である。

北極動物の王者

森林帯を越えてイヌイット（エスキモー）の住む高緯度北極に飛ぶ。この地方で比較的簡単に見られる野生動物は、ジャコウウシ、ペアリー・カリブー、北極ウサギ（ヘアー）、北極ギツネ、海ではアザラシ、セイウチ、ベルーガ、一角（クジラ）、北極クジラなど。



岩山の近くに住むシロイワヤギ

北極動物の王者と呼ばれるホッキョクグマは、ある一か所を除いて簡単には見られない。その唯一の場所とは、マニトバ州チャーチルである。ハドソン湾に面

づくと警報が鳴って、小さな子供は安全な場所に避難させられる。このクマを見るための観光ツアー（毎年十月）もあって、人々はバスに乗って見物している。

ベルグマン・アレンの法則によると、同じ系統の動物のからだは寒い地方のものほど大きく、球形に近くなるという。ホッキョクグマはそれにぴったりだ。ホッキョクグマも十二月から冬眠に入り、二月上旬ぐらいまで雪穴に入っている。クマの体型がズンズンしているのは、冬よりも関係がある。

カナダの高緯度地方には週二回の定期航空便があつて、楽に行くことが出来るが、野生動物を見るためには、さらにチャーター機に乗りつがなければならない。やはり人の住む集落には、それらの動物は近づかない。

レゾリュートからボデン島に渡る。春ならスキドゥで二日間かかるが、この島に行けば確実にジャコウウシに出会うだろう。現存する動物の中で最も原始的な形態をとどめているのがジャコウウシである。彼らは、常に十一頭ぐらいの群れをつくり、極北の草やコケ、柳（横に延びて生育する）などを食んでいる。オオカミなどの敵が近づくと、十一頭は円陣をつくり、その輪の中に子供をかかす、という独特の防御法を展開する。今世紀の初め、北極探検隊がエルズミア島の北部で大量に捕殺して、一時は滅亡しかけたが、最近ではカナダ政府の保護によって少しづつ増加している。

（探検ジャーナリスト）

北国の動物たち

ビーバー Beaver

カナダのシンボルは、カエデとビーバー。開拓時代に毛皮貿易の的となったビーバーほど、カナダの発展に大きな影響を与えた動物はいない。ビーバーの名をとった地名は全国各地に残っているし、切手、硬貨、紋章のデザインにも多く使われている。

ビーバーは、ダム作りの名人。木の枝や泥で流れをせき止めて、巣を作ったり、食物の水中貯蔵所にするのは、あまりに有名だ。

水と落葉樹林のある所ならカナダ国内どこにでも生息している。毛皮が美しく、ヨーロッパでビーバー帽が流行った頃は、一年に何十万匹ものビーバーが殺されたという。今世紀後半に入ってから保護政策がとられた結果、カナダ国内のビーバーは急激にふえ、今ではふえすぎて集団餓死のおそれのある地域も出てきた。

オオハクガン Greater Snow Goose

北アメリカに生息する三種のハクガンのうちのひとつ。羽の先(初列風切)が黒いのを除けば、あとはほとんど純白で、

とがった嘴はピンク色。北極のエルズミア島、ユリカ島、バフィン島北部などで巣をつくり、舌の両わきについたのこぎり状の「歯」で草の根をかみ切って食糧にする。



二十世紀初めには、世界中で三十羽ほどしかいなかったが、米加渡り鳥条約によつて三月十日から八月三十一日まです

べての渡り鳥の狩猟を禁止、また一九〇八年にケベック市で結成された狩猟家のグループがオオハクガンの繁殖地一帯を賃借して部外者による狩猟を禁止したため、今では約十五万羽に増えている。

オオハクガンは、表土や湖水が凍る九月中旬、北極を離れる。十月末には三万キロ離れたセント・ローレンス川河口にその姿を見せる。

カモシカ Moose

体長三メートル、体重八百キロ、褐色の巨体を悠然とゆすつて歩くヘラジカの

姿は、アラスカ国境からニューファンドランド東端までの森林地帯でよく見かける。

倒木をまたいだり雪中歩行するのに便利な長い脚、湿地でも沈みにくい幅広い偶蹄、そして強靱な体力とバイタリテイで、どんな荒地でもやすやすと越えていく。

水中では五メートルも潜つて水底の草を食べたり、あるいは対岸まで二十キロを一気に泳ぐこともできる。

大食漢のヘラジカは、小枝や樹葉、水生植物などを一日に三十キロ近く食べる。食糧の乏しい冬になると、樹皮までがして食べ、林業に大きな被害が出ることも少なくない。

ヘラジカはクマやオオカミの餌食になるが、概して天敵が少なく、野生動物としてはふえすぎが問題となる珍しいケース。(カナダ全国に五十万頭以上いる。)

カリブー Caribou

見事に枝の張つたツノで知られるカリブーは、北方カナダと南の山岳・森林地帯に広く分布して住み、二十五セント硬貨にも刻まれて、ビーバーとともにカナダ人に親しまれている。

主として地衣類を食べ、秋になると大群をなして南方の森林地帯に移動する。その様は、野生動物の見事なスペクタクルとして、北方観光の目玉のひとつになっている。

カリブーは、インディアンやイヌイッ



トにはなくてはならない貴重な経済資源で、肉は食用、皮は衣服や敷物、くつ、テ

ント、ツノや骨は針などの日用品に、糞は燃料に、と捨てる所がない。

一九四九年の航空調査で約六十七万頭いたのが、五五年の調査では二十八万頭に減り、一時は絶滅も心配された。だがハンターの規制などによりその数は大部分回復し、現在は北方住民の生活の糧として上手な管理が目ざされている。

ハイイロクマ Grizzly

ハイイロクマについては数多くの伝説があるが、その生態がわかつてきたのは、比較的最近になってからのことだ。

ハイイロクマ(グリズリー)は、ヒグマの一種で、ホツキョククマと並んで北米最大の肉食獣である。しやくれた顔と長いツメが特徴で、灰色クマとはいっても白から黒に近いものまで濃淡はさまざま。

以前は北米大陸の西半分にも広く住んでいたが、今日ではアラスカやアリゾナ・シユ・コロソビア州など、主として北西部の山や森に限られてしまった。シカやヘラジカなどを襲つこともあるが、食糧は主として木の根や葉っぱで、それほどの悍猛さはない。とくに好きなのがリスの類。たつた一匹のリスを穴から掘り出す

のに何時間もかけ、そのおけく逃げられてしまう間の抜けたところもある。嗅覚が鋭く、はるか遠くから動物の死体のある場所を知ることができる。

雑食家のハイイログマにとって、人間のゴミ捨て場は、格好の餌場である。三百キロから四百キロの巨体をゆすつてゴミをあさっているところを、よく銃で撃たれたりする。ハイイログマは求めて人間を襲うことはないが、追いつめられるとキバをむきだして手向う。

ハイイログマは総数が少ない上、開発によって生息地域が狭められてきた。適切な保護措置をとらないと、絶滅の危険もある。

オオツノヒツジ Mountain Sheep

木く螺旋状に曲がったツノ（おす）がひときわ目を引くオオツノヒツジは、別名ロッキー・マウンテン・シープといわれるように、主としてロッキー山脈の岩場に近い地域に住む野生のヒツジである。アラスカからユタコン準州にかけて分布



(大西時夫氏撮影)

するドールシ
ープや米カリ
フォルニア州
デスバレーに
住むデザート
・ビッグホー
ンはその仲間
夏は山地のひらけたところに住み、外敵に追跡されると近くの岩場に逃げる。きわめて敏捷で、やはり山岳地帯に住む

シロイワヤギと同じように、急な勾配でも駆け登っていく。冬は食糧（主に草木類）を求めて、低地に移動する。

十九世紀初めには、北米全体で百万頭はいたと思われるが、家畜用羊がもたらしたさまざまな病気や牧畜による生息地の縮小、狩猟などによって、現在では約二万五千頭に減った。しかし、近年は国立公園や禁猟区で保護された結果、その数は少しずつ増えつつある。

ハヤブサ Peregrine Falcon



鳥類の中では最も飛ぶのが速い（時速二百九十キロで急降下する）といわれ、三千年も昔からタカ狩りに用いられてきたハヤブサ。長く、とがった翼、鋭い目、先が鉤状に曲がって中ほどに歯のような突起のあるくちばし、強力なツメ―食肉鳥として面目躍如たるものがハヤブサにはある。

ハヤブサはほとんど世界中で見られる。カナダでは、三亜種がそれぞれブリティッシュ・コロンビア州沿岸（ほとんどが留鳥）、北米大陸の北極を除くその他の地域（北方では主として渡り鳥）、そして北極圏（渡り鳥）に生息している。

北米の大部分では法的に保護されているが、食物連鎖の最後に位置しているた

絶滅寸前から甦った

アメリカシロヅル

Whooping Crane

つやのある真白い体。長い首。長く薄黒く、とがった口ばし。細長く黒い脚。一メートル五十センチもある堂々とした背たけ。そして全長二メートル近くも広がる羽をゆつくりと力強く動かし、頭をぐつと伸ばして槍のように飛ぶその優雅な姿―。米国テキサスで冬を越し、毎春、北米大陸を一直線に北上して、カナダ北西準州のウッド・バツファアロー国立公園にたどり着き、巣作りをしてヒナを育てたあと、秋にまたテキサスへ戻っていくアメリカシロヅルは、最も美しい鳥のひとつである。もともとそれほど多くなかったアメリカシロヅルであるが（一八五〇年でも北米大陸全体で千五百羽しかいなかったと推定されている）、その美しさゆえにハンターに狙われ、その数はだんだん減っていった。北米大陸の開拓が進むにつれ、アメリカシロヅルが越冬したり、巣ごもりする場所が急速に少なくなったのも大きな原因である。

一九一八年には保護鳥に指定されたが、その数は減り続け、一九四一年にはわずか十五羽となり、二、三年後には絶滅するだろうといわれた。

自然愛好家や生物学者が保護を訴え

た結果、一九五六年には二十七羽に増えた。しかし、これだけでは絶滅の不安は去らない。

そこで一九六七年、カナダ野生生物管理局と米国漁業・野生生物局は、ウッド・バツファアロー国立公園で探し出した卵を人工的に孵化させて、人の手で個体数を増やすことにした。その結果、一九七一年には捕獲、保護されているアメリカシロヅルは五十九羽に達した。

しかし人間に保護されたアメリカシロヅルは、卵を生まなかった。そこで新たに二つの案が考え出された。ひとつは人工受精である。七八年には、この方法で一羽が十個、もう一羽が九個の卵を生んだ。もうひとつは、国立公園でとって



撮影Lorne Scott

きたアメリカシロヅルの卵を、比較的数の多いカナダヅルに抱かせて孵化させる方法で、これも大体うまくいった。

こうして、アメリカシロヅルはおおよそ百二十羽に増えた。まだまだ安心はできないが、今後はもっと多くのアメリカシロヅルがああ美しい姿を見せてくれるだろう。

め、直接、間接的に農薬など化学薬品の被害を受けやすく、減少が心配されている。

ウッドチャック Woodchuck

聖燭日（グラウンドホッグ・デー、二月二日）になると、ウッドチャックが長い冬眠から醒め、土の中の巣から出てくる、という言い伝えが北アメリカにある。



もし自分の影を見たら巣へ戻る。これは春の訪れが一か月以上も遅れているという証拠だ。影がなければ、外へ飛び出して活動する。春はそこまで来ている、というしるしである——。（実際は、ウッドチャックは三月まで冬眠から醒めない。）

ウッドチャックは、齧歯目リス科の、脚が短く、ずんぐりした哺乳動物で、北アメリカ東部を中心に、平地に穴を掘って生息している。かつては、馬がウッドチャックの掘った穴に落ちて脚を折ることが多く、農夫の嫌われ者であった。しかし、ウッドチャックの穴にアライグマ、キツネ、ウサギなどの毛皮動物（害虫も駆除してくれる）が住みついてくれるので、機械が馬にとって代わった今では、むしろ有益な動物となっている。

ホッキョクグマ Polar Bear

春の陽差しが北極海の氷をゆるめる頃、薄黄色の毛をしたホッキョクグマ（シロ

クマともいう）が、アザラシの巣を求めてあたりを嗅ぎ回る。アラスカ沿岸、北極諸島、グリーンランド、あるいはソ連北方の沿岸——と北極地方一帯のアザラシが、ホッキョクグマの主な獲物だ。

体重はハイイログマとならんで、陸生食肉類のうちで最も大きい。首と頭が長く、面高な顔をしている。密生した短い体毛は、冬の純白が春には黄味を帯び、夏ともなると金色に近くなる。

嗅覚が非常に鋭敏で、何マイルも先から獲物の嗅いをかぎつけたり、氷の下メートルにあるアザラシの巣を難なく見つけ出す。動作は素早いとはいえないが、けわしい氷のうねや急坂を登ったり、ハシタから巧みに身を隠したり、水にもぐってこつそりアザラシに近づいたりするのはうまい。夏の間は海藻やコケ、スゲなどの植物も食べる。

ホッキョクグマの最大の敵は人間だ。十七世紀以降、北極地方に探検隊や捕鯨船、毛皮商人が入り込むようになってから、たくさんのホッキョクグマが殺された。飛行機や雪上車の時代になって、ホッキョクグマの狩猟はさらに進み、その生存が懸念されるようになった。

現在、ソ連やグリーンランドを含めて約二万頭強と推測されている。そのうちおよそ半数がいるカナダでは、ホッキョクグマの狩猟が厳しく制限されており、綿密な個体数調査に基づいて、年間五百頭ほどの捕獲が認められているにすぎない。国境を越えて北極地域を移動するホッキョクグマの保護には、国際的な協力が必

要。一九六五年には、カナダ、グリーンランド、ノルウェー、ソ連、米国の間で初めてホッキョクグマに関する科学会議が開かれ、六八年からは国際自然保護連盟の主導による国際チームが調査活動を続けている。

ライチョウ Ptarmigan

強風が北方カナダの荒涼としたツンドラ地帯を吹き荒れる十月ともなると、夏の間一帯を暮らしていた何百種類という鳥の姿はほとんど消えてしまう。残っているのは、ライチョウ（雷鳥）など、ほんのわずかだ。北に住む人々にとって、ライチョウは、厳しい冬の間の大切な食



糧源であり、また伴侶でもある。

ライチョウはヨーロッパ、アジア、北アメリカの北極周辺および高山に住むガンの一種で、体はずんぐりとして、尾と脚は短く、羽も短くて丸い。春と秋に羽毛が抜け変わり、脚は柔かい雪の上でも歩けるように指の先端まで羽毛が生えているのが特徴。

北米には、何百万羽というライチョウが生息している。そのほとんどは人間が近寄れないところに住んでいるが、羊の放牧や山火事などで食物（草木の新芽、

葉、果実、種子、昆虫など）が減り、生息地に影響がでているところもある。

カナダガン Canada Goose

毎春、カナダの上空をほぼV字形に編隊を組んで北上し、秋になると南下していくカナダガン。そのエレガントな姿は、季節の変化を告げる風物詩である。

カナダガンには二十以上の異種がいるが、共通しているのは黒い頭、黒い冠、黒い首、それに首すじの白い模様。

オンタリオ南部とケベック、それに大西洋沿岸の三州を除いてカナダ全国に生息し、冬はほとんどが米国やメキシコ北東で過ごす。カナダガンが特に好んで巣を作るのは、オンタリオ北部の、一面に水ゴケが生えた沼地。春にやってきたカナダガンは、そこで卵を生み、ヒナを育て、親鳥自身も羽を生え変わらせ、八月から九月になると親子揃って暖い南へ飛び立つ。

カナダガンは狩猟によって大幅に減っていたが、捕獲数の制限、生存数の把握といった調査・管理のおかげで、一九四六年から十四、五倍も増えた。

カナダオオヤマネコ Canada Lynx

長くたくましい脚、先の黒い短い尻尾、ピンと立った耳——カナダオオヤマネコは、カナダ北方樹林地帯の精悍な狩人である。夜行性できわめて警戒心が強いため、その姿を見るのはなかなか難しく、

カナダの野生動物



- ① クルアン国立公園
- ② ナハン国立公園
- ③ ヨーホー国立公園
- ④ ジャスパー国立公園
- ⑤ バンフ国立公園
- ⑥ エルク・アイランド国立公園
- ⑦ ウッド・バッド・アロー国立公園
- ⑧ プリンス・アルバート国立公園
- ⑨ プラスクア国立公園
- ⑩ アンティコスタ国立公園
- ⑪ ケジミック国立公園
- ⑫ プリンス・エドワード・アイランド国立公園
- ⑬ アウエイトゥック国立公園

生態もよくわかっていない。

獲物は主にカンジキウサギ。大きな目と鋭い耳で獲物の存在をかきつけると、通り道に待ち伏せして、一気に襲いかかる。ライチョウ、ネズミ、リスなども食べる。

以前は、カンジキウサギの生息する針葉樹林帯なら、アメリカ各地に住んでいたが、毛皮が重宝がられて乱獲の対象となり、一九〇〇年頃から減り始めた。一九五〇年には米国、カナダ南部からすっかり姿を消したが、カナダでは六〇年代初めにはほぼ元通り回復した。五〇年代に毛皮の値段が下がって、捕獲数が減ったのが主な理由である。

シロフクロウ Snowy Owl

シロフクロウは、世界中のフクロウ科百二十三種のうちでもごく大形で、翼を広げると一・五メートルもある。わずかに褐色の斑点がある以外、全身はほとんど純白だ。鳥類としては最北端、北極圏のツンドラ地帯に住む珍鳥。

白夜に環境適応して昼間でも行動する。性質はおとなしいが、人や動物がそのなわばりに侵入したりすると、喚声をあげて追い払い、巣に近づく者には襲いかかる。

冬の寒さがきびしくなると食べ物（主としてノネズミ）が不足してくると、五年に一度くらいの割合で南下し、そこで冬を過ごす。多くの人々にとってはこの珍鳥を観察する貴重なチャンスだ。この

ときをねらってハンターが捕殺しないよう、各州ではシロフクロウの狩猟を禁じている。まれに北海道にも飛んてくることもある。

ピューマ Cougar

大型のネコ科の動物で、アメリカライオン、あるいはペンサーという名前でも知られている。南北アメリカに広く分布して、シカやウサギなどの小動物を捕って食べる。昔はよく家畜を襲ったため、人間に目の敵にされ、一頭につき五十ドルの賞金がかけてさかんに捕殺された。

今日、ピューマは人間の居住地から離れた、カナダ東部と西部の森林地帯に住



んでいる。捕殺賞金の慣行は廃止されたが、東部ではまだ絶滅の危険が去っていない。

バイソン Bison

バイソン——は知らなくても、バッファローなら知らぬ人はいない。西部劇によくでてくる、肩が大きくもりあがり、頭から肩にかけて長い毛におおわれたア

メリカ野牛のことである。

かつてアメリカ大陸には、特に大平原を中心に、五千万から六千万頭のバイソンが群れをなしていた。しかし肉が美味で皮も利用価値が高いため、新大陸に白人がやってきてから盛んに捕獲され、一八八五年までにはほとんど絶滅してしまっ

た。
カナダでは一八九三年、残った五百頭を保護する法的措置がとられ、一九二〇年代には北西準州とアルバータ州北部にまたがるウッド・バッファロー国立公園もできた。そして平原に住む六千頭のプレーリー・バッファローを米国からこの公園に移し、より大型のウッド（森林）バッファローと交配させた。その結果、現在ではウッド・バッファロー国立公園に約一万四千頭が昔のように群れをなすほどになった。そのほか、エドモントンの東にあるエルク・アイランド国立公園に六百頭、その他の国立公園にわずかつ

ジャコウウシ MUSKOX

カナダ北部とグリーンランドを原産地とするジャコウウシ（麝香牛）は、ひづめまでちぢれた長い毛でおおわれ、なかなか愛嬌のある姿をしているが、その歴史は悲惨だ。

体重約三百キロというジャコウウシは、古い昔から人間の食糧にされてきた。しかし、十九世紀に北極一帯へやってきた捕鯨者や毛皮猟師、探検家たちが毛皮や、

自分たちの、あるいは犬の食糧用に乱獲した結果、アラスカでは一八六〇年頃、カナダのハドソン湾南岸では十九世紀末にほぼ絶滅した。北極点に近いエルズミア島でも、一八八〇年から一九一七年の間に千頭が殺されたという。

そこでカナダ政府は一九一七年、餓死を避けるとき以外の捕殺を禁止、二六年にはクイーン・エリザベス諸島猟獣保護区を設けて国内のジャコウウシを完全な保護下においた。その翌年設定されたテ



ロン猟獣聖域では、現在も一切捕殺が禁じられている（北極の一部地域に住むエスキモーだけは、一定のジャコウウシ猟

が認められている）。

こうして保護されたジャコウウシは、その後どんどん増え続け、現在ではアラスカやソ連、そしてカナダ国内のかつての生息地などにも、移植されて、世界全体で約二万頭を数えるほどになった（半分は上はカナダ）。しかし気候の変化（食糧は草や地衣類）や北極の開発による減少も生じており、政府は一九六九年、ジャコウウシを新たに「絶滅の危機に瀕した動物」に指定して、保護を強化している。
天敵はオオカミ。オオカミに攻撃されると、外に向かって円陣をつくり、幼獣を円の中央に集めて防御する。

国立公園

野生動物の天国

カナダには28の国立自然公園がある。その面積は、およそ13万平方キロ。九州を差し引いた日本全体の面積よりやや大きい。そのうち13を選んで、公園に住む動物たちを紹介しよう。

★クルアン国立公園

ユーコン準州の南西部に位置するこの公園（約二万二千平方キロ）の半分以上は氷におおわれ、クルアン山脈とカナダの最高峰マウント・ローガンを擁するセント・エリアス山脈が走る。ここは、アメリカヘラジカやシロイワヤギが群れを作っているほか、森林トナカイ（カリブー）、クロクマ、アメリカグマ、オオカミ、コヨーテ、アカギツネ、クズリ、オオヤマネコ、ビーバー、カワウソなどの生息地として知られる。

★ナハン二国立公園

北西準州のサウス・ナハン二川に沿っ

たこの地域は、滝あり、溪谷あり、けわしい山岳や温泉のある美しい公園である。ここには、ヘラジカ、ビーバー、森林カリーブ、ドルルシープなどが生息している。

★ヨーホー国立公園

ロッキー山脈のふところに抱かれたヨーホー国立公園では、ヘラジカやオゾロジカ、ミュールジカ、ワピチ（鹿の一種）が徘徊し、山壁にはシロイワヤギやナキウサギの姿が見られる。いずれもハイイログマ、クズリ、コヨーテ、テンの獲物である。鳥類は数は多くないが、カモ、シジュウカラガン、シマヒト、ゴジュウカラ、アメリカキクイタタキ、タイラ



カナダハクガン

★ジャスパー国立公園

次のバンフ国立公園とともに世界的に有名なこの国立公園では、ハイイログマ、シロイワヤギ、オオツノヒツジ、マーモット、ナキウサギが、ときどきキャンプ場にも現われる。ミュールジカ、ワピチ、ヘラジカ、コヨーテ、テンなども見られ



かつてこのアルバータ北部の丘陵地帯で群れをなしていたエルク(ワピチリ大型のシカ)にちなんで名づけられたこの公園は、全体が柵で囲まれ、バッファロー、ヘラジカ、ワピチ、ミュールジカがゆうゆうと草を食べている。ここに住む動物

る。鳥は、ワシ、タヒバリ、ライチョウ、カケス、ハイイロホシガラス、カササギなど。

❖ バンフ国立公園

高峰、氷河、渓谷、そして澄みきった湖に囲まれた二つの世界的な保養地、バンフとレイク・ルイーズを擁するこのカナダ最古の国立公園には、毎年二百万人以上の人々が訪れる。高い所にはシロイワヤギやオオツノヒツジ、森にはビューマ、ワピチ、シカ、ヘラジカ、そして谷にはコヨーテ、オオヤマネコ、テンなどがたむろする。

❖ エルク・アイランド国立公園

としては、ほかに、トガリネズミ、アカリス、ホリネズミ、シマリス、ヤマアラシ、イタチ、コヨーテ、ミンク、ビーバーなどがいる。

❖ ウッド・バッファロー国立公園

スイスやデンマークよりも大きい、この世界最大(四万五千平方キロ)の公園は、一九二二年、絶滅しかけたウッド・バイソン(バッファロー)を保護するために設けられた。公園開設後、アルバータ州ウエインライトから六千頭のプリーリー・バイソンを運んできて交配させたところ、一八九三年には五百頭に満たなかつたウッド・バイソンが、八千頭余りに増えた。ここはまた、アメリカシロツルの唯一の繁殖地としても知られる。

❖ プリンズ・アルバート国立公園

作家で自然保護主義者のグレイ・アウルが、ビーバーと共に死ぬまでの七年間を過ごしたこの国立公園(サスカチュワン州)は、アナグマやワピチ、灰色オオカミ、シカ、ヘラジカ、クロクマ、バッファロー、オオヤマネコ、スカンク……と野生動物がきわめて多い。鳥も、オオアオサギ、キツツキ、ワタリガラス、ヒメレンジャク、さまざまな水鳥と種類が豊富で、アメリカシロペリカン、ミミヒメウ、セグロカモメの繁殖地にもなっている。

❖ プラスク国立公園

スベリオル湖の北東岸からテイップ・トップ山(標高六三〇メートル)のある

山岳地帯を含むこの公園には、イトシャジン、ハマエンドウなどが咲き乱れ、森林カリアー、ヘラジカ、オオヤマネコ、カウソウ、シカ、テン、ビーバー、オオカミが生息する。アビやアイサが湖岸と島の間を飛び、高い木の上からはタカが獲物を狙い、沼ではエサをついばむサギの姿が見られる。

❖ フアンデイ国立公園

潮差が世界的に大きい場所として知られるフアンデイ湾から奥へ広がる森林地



シロギツネ

帯が、フアンデイ国立公園である。

ユキヒメドリ、ノドジロシトド、ツグミ、ミンサザイなど八十七種の鳥がここで巣を作り、ヘラジカ、アカオオヤマネコ、クロクマ、オジロジカ、アライグマ、カンジキウサギ、ヤマアラシ、ビーバー、アカリスなどが生息する。

❖ ケジムジック国立公園

丘陵地帯に浅い湖や沼地が点在するこの国立公園(ノバ・スコシア州)には、東部カナダとしてはきわめて珍しい両生類、爬虫類、鳥類、植物が多い。特にブランディング・タートル(カメ)、リボン・スネーク(ガーターヘビ)は、大西洋沿岸ではここにしかいないし、北米大陸でははるか西部でしか見られないシロマスがいるのもひとつの謎とされている。

❖ プリンズ・エドワード・アイランド国立公園

砂浜、砂丘、砂州、森、崖が作り出すこの美しい公園には、コガモ、クビワキンクロ(カモ)などの水鳥が住みつき、夏や初秋には、海辺を飛ぶ何種類もの渡り鳥がここで羽を休める。ラステイコ島にはアオサギが巣を作り、砂丘にはハマヒバリやクサチヒメドリが飛び、樹上からは、ハイイロチョウヒが獲物を狙う。地上には、アライグマ、ジャコウネズミ、ミンク、イタチ、シマリスなどが住んでいる。

❖ アウエイトウック国立公園

面積約二万二千平方キロの公園の大半は、北極圏内に位置し、その四分の一、五千数百平方キロは厚い氷におおわれている。一帯には、地衣ぐらしか生えない。陸上には北極オオカミ、北極キツネ、北極トナカイ、レミング、そして北極クマ、海にはセイウチ、イッカクなどのクジラやアザラシが住み、また険しい崖や沿岸の島には、シロカモメなどさまざまな海鳥が巣を作っている。

乱獲から保護・管理へ

カナダの野生動物対策

森や湖、沼地に恵まれているカナダは、野生動物の宝庫である。特に森林カリブー、オオツノヒツジ、オオカミ、ハイイログマ、クズリは、カナダが世界の主要生息地となっている。

かつてインディアンやエスキモー（イヌイット）は、野生動物を食糧とし、あるいはその毛皮と骨を衣服や日用品の材料に利用していた。やがてヨーロッパ人が到来すると、毛皮貿易が発展し、それとともにカナダの国土が西へ北へと開けていった。そして、開拓が進むにつれ、教多くの哺乳動物や鳥が減り、あるいは消えていった。森林の伐採や火事、河水の汚染、産業や都市の開発、沼地の干拓、ダム建設などにより、野生動物の居住地も狭くなった。

しかし、野生動物の保護に対する関心は次第に高まり、早くも一七九四年に、当時は英国植民地だったノバ・スコシアがライチョウとアメリカカガモに対する保護法を制定したのをはじめ、一八二一年にはオンタリオ州で、一九〇六年にはプリンス・エドワード・アイランド州で、一九一三年にはブリティッシュ・コロンビアと北西準州で、猟鳥獣の種類や猟期を決

めた狩猟法が定められた。一八八五年にはバンフに最初の国立公園が設置され、

一九〇六年には国有地の北西準州を対象とした連邦政府の狩猟法が制定され、一九一六年には米国との間に渡り鳥条約が結ばれている。一八九三年には最初のバード・サンクチュアリ（鳥の聖域）がサスカチュワン州に設けられ、絶滅が危



カナダガンに足輪をつける野生動物管理官

ぶまれた森林バイソンを保護する法律も定められた。

こうした努力のおかげで、絶滅間際だったバイソン（バッファロー）は再び野山に群れをなすようになり、一時は絶えかけていたアメリカシロヅルも少しづつ増えてきた。ノバ・スコシア州ではオジロジカ、ニューファンドランドとブリティッシュ・コロンビアではヘラジカ、そして

北極ではジャコウウシの数が増えてきた。

現在、カナダの野生動物管理（単なる「保護」あるいは「保全」から、科学調査と啓蒙を中心とする「管理」に重点がおかれるようになった）は、州内の野生動物については各州政府が、渡り鳥と国有地（ユークン準州と北西準州、国立公園、国立歴史公園、森林試験場、インディアン保留地など）の野生動物については連邦政府が担当している。

連邦政府の所轄機関は環境省カナダ野生動物管理局（CWS）。CWSは一九一七年に議会の承認を受けた「渡り鳥条約法」に基づいて、渡り鳥を保護するために設けられたもので、次のような業務を行っている。

一、渡り鳥の習性、移動、移動による問題に関する調査研究、猟鳥の狩猟期や捕獲量の制限、繁殖地や種別生存数の実態調査。

一、渡り鳥の保護措置。CWSは、各州の野生動物管理担当者、ロイヤル・カナディアン・マウンテッド・ポリス（連邦警察）および米国の連邦・州政府と協力して、狩猟規則の違反者を摘発する。また八十か所以上の「渡り鳥聖域」をつくり、そこでは狩猟を禁じている。

一、渡り鳥については、そのほか、穀物への被害防止、シー・バード（海鳥）およびショア・バード（河口や海岸に住む鳥）の習性調査と保護、鳴鳥を中心とする非猟鳥の実態調査も実施している。

一、その他の絶滅に瀕した野生動物に関する調査研究、生息地の保全、各州・

準州の保護措置への援助。

一、環境調査。特に資源開発による生態系への影響が懸念されている北方での野生動物を守るため、CWSはハイウェイやパイプラインの敷設用地について助言し、マッケンジー・デルタや北極諸島における鳥や哺乳類の動き、ジェームズ湾などでの水位の変化による水鳥数への影響を調査している。

一、絶滅のおそれのある野生動物の保護。CWSは急激に減ってきたハヤブサやアメリカシロヅル、森林バイソンの繁殖に力を入れてきた。北極グマについては、カナダでは原住民の狩猟権が認められている（公海における北極グマは、米、加、ソ、ノルウェーの四か国協定で保護されている）が、CWSでは北極グマの数、寿命、冬眠習性、生殖、食性、移動などを調べて、毎年の許容捕獲数を決め、その数が減らないようにしている。

一、「絶滅に瀕した野生動物植物の取引に関する条約」（通称「ワシントン条約」）——カナダは一九七四年に署名の実施。

一、自然および野生動物、植物を守るために設けられた国立公園での、野生動物およびその生息地に関する調査。

一、毒性化学品の野生動物に対する影響の調査。

一、CWSはまた、野生動物にとって特に重要な土地を選んで、国立野生動物地域に指定した。当初は渡り鳥が巣を作ったり、羽を休めたりするためのものがあったが、現在はほかに野生動物のための地域もある（全国で四十数か所）。

アングル・サーモン

「ジム・マレーという有名なカナダの釣り人が札幌に来ています。サケ釣りのベテランで、サケの生態にも詳しい。一度会って話をしてみませんか……」とチユラリスト鍛冶英介氏からの電話。一九七九年二月のことである。私達は前年秋に旗上げたカムバック・サーモン実現の第一歩として、

この年の三月末に札幌の豊平川に百万尾の稚魚を放流すべく、関係諸官庁の間を走りまわっていた。かねがねこの運動は、教育問題としても重要な意味を持つと考えていた私達は、子供達を動員するために、もうひとつ強力なシンボルを必要としていた時である。カナダではサケ問題はどのようになっているのか……。そこが知りたくてマレー氏に会うためにグリーンホテルにとんでいった。

私達からみると大男でハンサムなマレー氏。カナダでも有数の日本通で、剣道五段。カナダ太平洋航空勤務で、自称シルバー・フォックス（要するに少し年をとりすぎている……の意）。

あいさつもそこそこに、スポーツ・フ

ィッシングから河川環境の保全、さらには北太平洋区におけるサケ漁と資源問題にまで話がおよんだ。鍛冶氏の説明で、彼はPacific Salmon Societyの理事であること、さらにマンガ「釣りキチ三平」に実名で登場していることを知った。札幌でのカムバック・サーモンの運動について解説すると、身をり出してきて、全面的に応援したい……という。後日、

よしまさかず
吉崎昌一



マレー氏とある小学校を訪れた時に、殆んど小学生が彼の名前を知っていたのは、また驚かされた。こうして願ってもないスターが誕生したのである。カナダからのサケおじさん——アングル・サーモンである。

三月末、シロザケの稚魚百万尾の放流壮行会が、まだ時折り小雪のちらつく豊平河畔で行われた。このセレモニーに、アングル・サーモンは、資料をどつさり抱え、約束通りカナダから飛んできてくれた。「サツポロのサケの運動はすばらしい。カナダにも同様な動きが芽生えつつあります。一度カナダにやってみませんか？」

カナダのサケ・プロジェクト

一九〇〇年代の初頭までは、BC州の諸河川も時期になるとサケが満ちあふれていた。しかし産卵のために河口に集ま

ってくるのを漁業者が一網打尽にする訳だから、資源はどんどん減少する。いかにサケ王国BC州といえども、これではなまらない。それに追い討ちをかけたのが、林業の発達による産卵床河川域の破壊とダムによるサケ上流の遮断である。一九七〇年代末には、おどろくなかれサケの資源量が一九〇〇年頃の約二分の一にも減少してしまうのである。

この状態を心配したカナダ政府の漁業省は、一九七七年になって、BC州のサケ資源量をかつかつて記録に残っている量、つまり現在の倍量にまで復活させるべく行動しはじめた。SALMONID ENHANCEMENT PROGRAM (SEP) の設置で



川をそ上するサケ

(北海道映像記録株式会社提供)

ある。一億五千万ドルの予算で発足したこの組織は、将来、国の税収を高め、雇用の機会を増やして地域の振興をはかり、さらに原住民であるインディアンの生活に寄与し、環境の保全をも目指すものである。私達がとくにこの組織に関心をも

つたのは、日本の単なる「補助金行政」とちがひ、教育面の重視と地域ボランティアの活動が大きな軸としてとりあげられていたからであった。

百聞は一見にしかず——一九七九年九月、私は札幌市民代表としてえらばれた児童文学研究者西田良子さんと、バンクーバーに飛んだ——。

SEPのスタッフのガイドできめのこまかい教育活動の実態を見学して歩き、各地のふ化場の調査、専業漁業とスポーツ・フィッシングの関連など、私達の知識は急増したといつてよい。バンクーバーからあまり遠くないシニエルト小学校を訪問した時、西田さんは、子供たちのゲームにもサケ教育をとりいれているのを見て感激していた。これまでスーパーマーケットのサケにしか関係がなかった西田さんが、サケの実態を知るにつけ、熱烈なカムバック・サーモンの支援者に変ったのである。サケのもつみごとな生命連鎖、そして環境とのかかわりあい、回遊のロマンなどが、現在の子供達の教育に欠けがちな生命の尊厳というテーマに、ぴったりだというのである。

SEP側も、はじめは若干とまどつていたらしい。北海道といえは、サケふ化事業の先進地(?)である。そこからサケの専門家でもない日本人が、サケ問題の調査にとびこんできたのだから、無理もない話である。例えば、こんな質問をS

(十六ページに続く)

千葉市とノースバンクーバー

姉妹都市がとりもつ縁

土屋 津以子

カナダの西玄関バンクーバーの中心街を抜け、バラード入江にかかるライオンズゲート・ブリッジを渡ると、目の前に高層の建物が広がってきます。大きな通りが麓から山の頂上に向かって走り、そここの森や公園にはリスが遊び、鳥が鳴き、色とりどりの花が咲き乱れています。

この美しいノース・バンクーバーをはじめて訪問したのは、真冬でした。どんなに寒いことかと、防寒の仕度で行ったのを覚えていますが。でも暖流のおかげで、肌をさすような寒風は全くなく、ただしとしとと雨ばかり降っていました。晴れた日には山々の頂に雪が見え、実に壮麗でした。街から車で十分も登るとスキー場があり人々はスキーを楽しんでいます。夏には夜九時、十時に日が暮れるので、人々は仕事が終わった後もテニスやゴルフに興じると聞きました。

昨年八月にも、ノース・バンクーバー

を娘と一緒に訪ねました。これで五度目の訪問です。そのたびに泊るのには、弟夫婦の家です。弟の妻デナルダは小学校の先生で、十年前、姉妹都市交換学生のリーダーとして来日したとき、わが家に滞在したのが縁となって、弟と結婚したので、弟はいま、BC州政府の電力公社に勤めています。

市長のジャック・ロウクス氏は、デナルダの小学校の校長先生だった人です。そのため、教育には特に理解の深い方です。私も、訪問のたびに、松井千葉市長からのメッセージをお渡しし、千葉市の様子をお話します。今では千葉市民の殆どの人が、姉妹都市の意義を認識するようになり、千葉市から中学生の剣道訪問、山岳会の人達の交流など、あらゆる方面にわたって交流がなされるようになりました。カナダ建国百年祭の時には、日本の歌と踊りに、集まった市民の人々が歓声を上げて喜んでくれましたので、民間外交のお役に立てた喜びで胸がいっぱいになったこともありました。

千葉市と姉妹都市を結んで十四年。以来毎年、夏の一か月間、交換学生の交流を続けています。私も受け入れ家庭を何度ももいたしました。一昨年の夏、ロンソ

ン通りのバス停でバンクーバー市街行きのバスを待っていた時のことです。若い女の人がしげしげと私を見つめています。私がふと気付くと、それは六年前に受け入れたローレルでした。「ローレル」——思わず名を呼びますと、彼女もとびついて来ました。涙をいっばいためて再会を喜び合い、バスが来たのも忘れて思い出話にふけりました。

今度もロウクス市長と夕食会でお会いして、松井市長より託されたメッセージをお渡し、千葉市の様子、交換学生の様子などをお話しました。夕食会では、市長夫妻をはじめ、弟の友人、デナルダの親族など、みんなが心から歓待して下さい、異国の地とは思えぬ友情を示して下さいました。弟の友人の中に日系二世の方もいて、日本の歌を聞かせて下さり、思わず感激しました。市長夫妻を囲んで



ノース・バンクーバーの街角で。左端は筆者

のなごやかな雰囲気、に、カナダ人の気質をかい間見た様な気がしました。

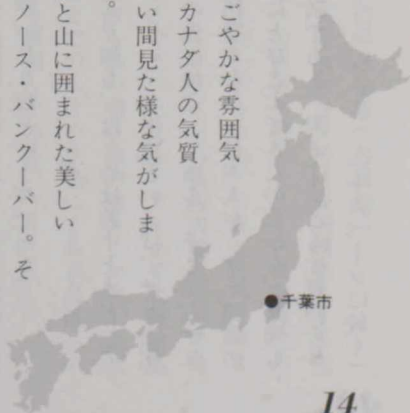
海と山に囲まれた美しい都会ノース・バンクーバー。その豊かな人々の心に接して、すてきな都市と姉妹である千葉市民の幸せを嬉しく思いました。

(千葉市姉妹都市市民の会理事)

千葉市とノース・バンクーバー市が姉妹都市提携をしたのは、千葉市の市制五十周年にあたる一九七〇年一月一日。両市のライオンズクラブが姉妹関係を結ぶことになり、市民相互の友好を推進するため、ぜひとも市同士が姉妹提携して欲しい、と市当局に要望したのが、縁組みのきっかけである。

ノース・バンクーバーは、木材、鉱石、穀物の重要な積み出し港として知られる。製造業が盛んで、造船所も多い。周辺にそびえるクラウン、ライオンズ、グラスといった山々は、スキー、登山、溪流釣りに最適で、またノース・バンクーバーに美しい景観をそえている。

毎夏の青少年相互派遣、児童絵画の交換展示、ノース・バンクーバーから少年音楽隊の千葉訪問、千葉市から少年剣道団のノース・バンクーバー訪問など、両市は活発な交流を続けている。



現代カナダの代表的作家

マーガレット・アトウッド

小説 *Edible Woman* や詩集 *Circle Game*、あるいは文学評論 *Survival* など世界に多くの読者をもつマーガレット・アトウッドが、マスコミに対してインタビュー一切お断り宣言を出したのは、*Life Before Man* を発表してすぐ

カナダ人物記⑦

のことだった。

孤高を好むアトウッドに対して、冷淡な女、ユーモアのない怒りっぽい人、と批判する者や、その作品の基調にある非ロマンティズム、フェミニズム(女権拡張主義)、カナダ人＝精神分裂症という観念、あるいはあくまでもカナダ的な

ものに固執するナショナリズム——といった面に対して、敵意ある中傷さえ書く批評家もあった。

だが逆に、こうした思想を、豊かな言語感覚と現実への鋭い洞察力に支えられて作品化したからこそ、アトウッドは高い評価を得た、ともいえるのである。

アトウッドは、一九三九年、オンタリオ州オタワで生まれた。昆虫学者の父は、

研究のため、彼女がまだ赤ん坊の頃、家族を連れてケベック州北部の未開地に移り住んだ。そして、森を切り開いて小屋を建て、子供たちに荒々しい自然を愛し、そこで生き延びる知恵を授けた。同時に両親は、きわめて知的な環境も与えたという。

アトウッドは、長じてトロント大学に進み、ノースロップ・フライの下で英文学を専攻。さらにハーバード大学で研究を続ける。詩は早くから書いていたが、この頃から作家を志望する。当時、カナダ人が世界的な作家の仲間入りをするには非常に難しいという、一般的感覚が支配的だった。「私は確かに正気を逸していたのかもしれない」と彼女は回顧する。処女詩集は大学卒業の年にすでに出していたが、一九六六年、二十七歳のとき出した二番目の詩集 *Circle Game* がカナダ総督賞を受けた。そして二年間の出版社勤務の後に、初めて書いた小説 *Edible Woman* (一九六九年)で、彼女は作家としての地位を確立する。

アトウッドは、詩は言葉と自分との関係を映し出すもの、小説は自分の世界観を表現するもの、と語る。アムネスティ・インタナショナルの会員でもある彼女は、オリの軍事政権の暴虐を詩で再現し、あるいは女性のありふれた受難「レイプ」を詩で糾弾する。「この世がある限り、

作家はそれを証言するほかない。人間的なものは何ひとつ拒否できないのです。」

彼女の提示する世界像があまりにも残酷だという批評に対して、マーガレットは次の詩をもって答える。

「目をあけてこの世を見るとき／目は涙のプリズム／ならばなぜ／私の目が間違っているというのか」

マスコミきらいの彼女も、女権拡張運動や作家の世界では熱心な活動を行っている。取材源の秘密を守る法廷闘争をたかつかっている作家を支援したり、カナダ作家同盟の副議長として、不運な作家、埋もれた新人への援助などに心をくんでいる。

アトウッドは、家庭のことをほとんど語らない。だが、同じ作家で夫(といっても法的に結婚しているわけではない)のグレイム・ギブソンが、彼女の精神的



マーガレット・アトウッド

バランスに大きな役割を果たしているのは事実のようだ。また六歳の愛娘ジェシーの存在は、「私の視野を、世界を広げてくれた」という。短編 *Giving Birth* の中で、出産を終えた母親が外界のもの一切をいとおしく感ずる場面が描かれる。

娘に与える詩、

“How can I teach her / some way of

being human / that won't destroy her?
...も素晴らしい。

Life Before Man (七九年)は、大きな貴否両論を巻き起こした。一人の男と二人の女が織りなす情緒障害と性的混乱と別離と離婚の世界は、まさに「現代」を描いた小説と評されている。アトウッドはしかし、ペシミストといわれるのを嫌う。「私は作品の中で希望を与えていませんが、それは二十世紀の作家なら当面のことです。……でも私は、人類が明日は今日よりもうまくやれるようになると思っています。そう信じなければ、社会改革も政治活動も一切信じられなくなるでしょう。書く行為自体、希望の行為であり、信念の行為ですから。」

八一年十月に出た小説 *Bodily Heart* は、カナダとアメリカの批評界から絶讃され、ベストセラーとなった。

既刊作品／詩集＝ *Double Persephone* (1961), *The Circle Game* (1966), *Animals in That Country* (1968), *Producers for Underground* (1970), *Journals of Susanna Moodie* (1970), *Power Politics* (1971), *You Are Happy* (1974), *Selected Poems* (1976), *Two-Headed Poems* (1978), *True Stories* (1981)

小説＝ *The Edible Woman* (1969), *Surfacing* (1972), *Lady Oracle* (1976), *Life Before Man* (1979), *Bodily Heart* (1981)

短編集＝ *Dancing Girls* (1977)

評論＝ *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature* (1972)

(十三ページより)

EPのメンバーからぶつけられたことがある。「専業漁業者でもない人々が、何でサケに執心するのですか」「北海道では淡水域でのサケ釣りが禁止されていると聞いています。その地域の一般人がどうしてカムバック・サーモンに関心を持ったのですか」等々。私のつたない英語で、我々の理念を十分に説明しつくすことは到底望むべくもない。困り果てて、ついに「貴方の国でもバード・ワッチャーがたくさんいますね。私達は日本でフィッシュ・ワッチャーを育てる計画なのです。その人々は将来、河川環境の保全とサケ資源のための有力なタスク・フォースになるでしょうから……」と答える始末であった。

SAVE THE SALMONの誕生

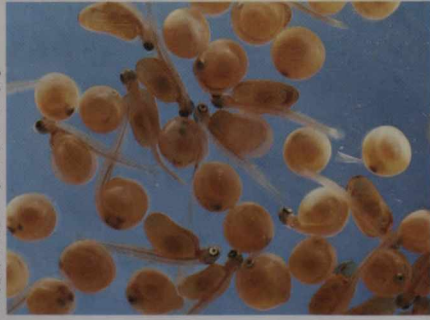
一九七九年十月、BC州最大の新聞社であるバンクーバー・サンのメンバーが、サケのキャンペーンのためにキャンベルリバー市の近くのApril Pointに集まった。ここでは、W・ピーターソン氏達が中心になって、自分達でふ化場を作って運営している。この集まりに招かれたマレー氏は、熱っぽく日本のカムバック・サーモン運動を解説したそうである。特に彼が強調したのは、この運動に子供達が一翼を担っているという点であった。

当時バンクーバー市内では、二つの学校がサケを自然環境教育にとり入れており、これらを拠点にすることによって、豊平川タイプの運動を大規模に展開でき

る可能性が検討されたい。

一九八一年五月、バンクーバー・サン紙をスポンサーとして、市民運動が開始された。子供達から名称を公募した「SAVE THE SALMON」組織の誕生である。事務局長には、サン紙のジム・マクドナルド氏があたり、積極的な広報活動とカンパ活動が展開されていく。一般人からも企業からも、カンパが相次いだ。十セント、二十五セントという子供達からの寄付や、ボランティアの申し込みも続出して、キャンペーンは大成功。そしてついに、第一の目標だった子供達のためのふ化場建設にふみ切ったのである。

場所はバンクーバー市内から車でわずか四十五分、スクワミッシュ川上流にあるノース・バンクーバーの野外学校敷地内である。この施設は、三、四万粒のサ



ふ化したばかりのサケの子。

(北海道タイムス提供)

ケの卵を収容することが可能で、子供達はその運営に参画する、BC州では初めての試みである。完成したのは一九八二年五月。その開場式は、連邦政府漁業・海洋省のロメオ・ルブラン大臣が参加して行われた。

SAVE THE SALMONとカナダ太平洋航空の招待でこれに参加した私は、北海

道の原住者アイヌ民族の一人である萱野茂氏と同行した。BC州も北海道も、ともに原住者はサケと密接な関連をもって生活していた、と考えたからである。

萱野さんは、式場で伝統的な民族衣装をまとい、アイヌ語で神々にお祈りの言葉を捧げてくれた。「天と地の神さま方、この地にたくさんのサケが戻って来ますように……。このふ化場がサケの子孫に大いなる力を与えますように。そして昔のように豊かな生活が営めますように……。」「アイヌとインディアンもサケを仲介として友好が結ばれますように……」。

サツポロさけ会議

一九八二年十月十五日、私達がかねてから念願していたカムバック・サーモンの会議を札幌で開催することができた。参加者は、日本各地で運動をすすめている人々の代表三十名ほどと、カナダ、米国、イギリスからのお客である。カナダからはワッド・フォークナー博士、SAVE THE SALMONのジム・マクドナルド氏、SAVE OUR SALMONのW・ピーターソン氏、ゴードン・タニワ氏が参加した。一日半にわたるセッションで、私達は地球上のサケ属の資源を良好な状態で未来に残すために協力しあっていくことを確認した。

サケを通じて、太平洋の両側で始められたカムバック・サーモンの運動は、今後ますます拡大し、大きな力になっていくにちがいない。

(北海道大学文学部助教授、
さつぽろサケの会代表)

○あけましておめでとございます。月日の移り変わりはあわたたく、変わらないのは編集子の技量と想像力のみか、とタメ息がでます。今年もどうぞよろしくお願いします。

○久しぶりにカラー特集をお送りします。カナダの野生動物といつても、その種類は数知れず。そこでできるだけカナダ特有もしくはそれに近い動物、あるいは保護されている動物を中心にとりあげてみました。それぞれの動物の名称は、あまり専門的にならないように、ごく一般的なものを使いました。

○カナダ北方を何度も訪れている五月女氏と、札幌の豊平川にサケを呼び戻す運動を主導し、BC州での「サケを救え」キャンペーンにも詳しい北海道大学の吉崎先生に、それぞれのご体験にもとづいたご報告をいただきました。

○次号から本紙の郵送リストが変わります(三ページ参照)。ご迷惑をおかけするかもしれませんが、どうぞご協力をお願いします。(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒東京都港区赤坂七丁目三三六
カナダ大使館広報部